

野鳥による森づくりを進めよう！

野鳥たちは、タネの散布を通じて森づくりに貢献しています。

野鳥と植物との自然な関係を利用すれば、生物多様性に富んだ魅力的な森をつくることができます。

しかし、野鳥による森づくりの手法は、まだ十分に確立されていません。

そこで、日本野鳥の会では専門家による検討委員会を設置し、有効な手法の検討を重ねてきました。

その結果をふまえ、野鳥による生物多様性に富んだ森づくりを進める上での留意点を、

このリーフレットにまとめてみましたので、

これらを参考にしながら、野鳥による森づくりにチャレンジしてみてください。

01

豊かな森を地域に残して育もう

地域ごとに広葉樹を中心とした豊かな森林環境があれば、そこが種子の散布源となり、野鳥たちが周辺に多様性に富んだ森づくりをしてくれます。そのためにも、できるだけ多くの豊かな森を残し、適正に管理し維持してゆくことが大切です。しかし、このような森は少なくなっているのが現状です。その場合、野鳥たちが運んできた多様な樹種を残し育んだり、その地域や土地に合った樹種の植栽を行い、散布源となる森を残していきましょう。

02

実のなる多様な樹種を植えよう

野鳥たちが実好んで食べるのは、主に秋から冬にかけてです。木は種類によって熟す時期や期間が異なるので、植える樹種を選ぶ場合には実の熟す時期や期間を考慮し、できるだけ長い期間野鳥たちが訪れるようにデザインするとよいでしょう。長い期間訪れるということは、それだけ多くのタネを運んでくれることにつながります。

また、果実の色や大きさも考慮することが大切です。一般に赤い実は野鳥に発見されやすい傾向にあります。一方で、黒い実は一見目立ちませんが、果実を好むヒヨドリなどは、しっかりと見つけて採食します。

野鳥による種子散布を期待するには、野鳥が丸呑みできる実の大きさが重要です。野鳥が口を広げた大きさは、だいたい8～13mmですので、このサイズの実がなる樹種を選択するとよいでしょう。

03

遺伝子に配慮した植林をしよう

植林する際には、同じ樹種であっても産地に気を配ることが重要です。例えば「ブナ」は、多雪地帯である日本海側や、雪の少ない太平洋側にも広く分布しています。日本海側の「ブナ」と太平洋側の「ブナ」では、持っている遺伝子の型がある程度異なっています。それは、それぞれの地域の気候などの環境条件によって淘汰を受けた結果、その地域に適応した遺伝子の型になったためです。そのため、太平洋側の「ブナ」を日本海側に植林すると健全には育ちません。しかし、一部の個体は不健全ながらも生存し、やがて花を着けるようになります。そして日本海側の「ブナ」と交雑を行い、その地域にない遺伝子をもつ種子が作られてしまいます。これを「遺伝的攪乱(かくらん)」と呼びます。この交雑した種の中には、不健全ながらも生き残る個体が現れて、もともと適応している森林の「遺伝子攪乱」が長い間続くこととなります。そうすると、森林が衰退していく可能性も否定できません。そのため苗木を導入する際は、産地やもとなる木(母樹)の産地を調べ、どの程度遺伝的差異があるかを確認し地域的に近い木を植えることが大切です。

04

止まり木効果を活用しよう

木の實のタネを運ぶ野鳥たちは、木の枝によく止まります。この習性を利用し、止まり木となる枯れ木を残したり、樺を立てたりすると、そこに止まった野鳥がフンを落とし、そこから木々が芽を出します。公園などで、野鳥がよく止まる樺などの下から、周辺にはない樹種が育っているのを目にすることがありますが、植林地においてもこの「止まり木効果」を活用するとよいでしょう。

05

下刈りに注意しよう

下草を刈る際に、野鳥などによって自然に運ばれ芽を出した若木を、下刈りの際に誤って刈り取らないよう注意しましょう。ただし、要注意外来生物に指定されているトウネズミモチなどの望ましくない樹種を見つけた場合には、この段階で除去するのがよいでしょう。

06

森林のギャップを有効に利用しよう

多様な環境を構成する要素として、森の中で倒木などによって生じるぽっかりと開けた空間など(林冠ギャップ)も重要です。日当たりのよくなったこのような空間では、野鳥たちが運こんできた種子が生育する可能性が高くなります。なお、場合によっては人為的にこのようなギャップを作ってやることも、良好で多様な森林環境を管理する手法の一つです。

07

鳥類相にも注目しよう

野鳥による森づくりを期待する場合には、可能な限り現地周辺の鳥類相を把握しておきましょう。『野鳥と採食植物相関表』を参考に、どのような野鳥がどのような植物を運んでくれる可能性があるかなどを検討していけば、魅力的な森づくりができるでしょう。

なお、多様な鳥類相は、多様な環境を持った森に育まれることを忘れてはなりません。ササ類などの藪にはウグイスなどが好んで生息するなど、森が多様であればあるほど多様な鳥類相がみられ、よりさまざまな樹種の種子散布が期待できるからです。



2018年6月発行

野鳥が広げる豊かな森づくりについて詳細は、(公財)日本野鳥の会公式ホームページで紹介しています。

日本野鳥の会 野鳥が広げる森づくり [P検索](#)



Staff

企画制作：公益財団法人 日本野鳥の会・野鳥による生物多様性に富んだ森づくり検討委員会
写真提供：日本野鳥の会栃木県支部、上原健、斉藤亮、佐藤仁志、萩原洋平
イラスト：川田裕美
デザイン：ヤマザキアキオ

本パンフレットは国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」助成金により公益財団法人日本野鳥の会が作成しました。



▼コゲラ

▲シジュウカラ

野鳥が広げる 豊かな森づくり

公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

野鳥が森をつくる？

～野鳥と植物の意外な関係～

「野鳥が森をつくる」というと、驚く方がいるかもしれません。でも、これは本当の話なのです。

多くの野鳥は、木の實を丸呑みにして消化し、栄養をとっています。

しかし硬いタネ(種子)は消化できないので、フンと一緒に排出されます。

野鳥は飛んで移動するので、フンを色々な場所に落とします。

フンと一緒に地面へ落ちたタネは、やがて芽を出します。

植物の中には、鳥に食べられ消化管を通ることで芽が出やすくなる種類も確認されています。

また、ヤマガラやカケスなどの一部の野鳥は、エサの少ない冬を乗り切るために、

ドングリなどの木の實を土の中や木の隙間に埋めて隠しておきます。

これらのうち、食べ残したり隠し場所を忘れ放置されたタネから芽が出て、やがて大木へと生長することが知られています。

このように野鳥たちは、タネの散布を通じて森を育てるのにも役立っています。

身近な場所で探してみよう！

大きな木の根元から生えた別種の木



▲コナラの根元から生えたマデハシイ

公園の植込みから生えた別種の木



▲植込みから生えたネズミモチ

庭などで植えた覚えのない木が育っていたり、公園の植込みの隙間から違う種類の木がノコギリと生えていたら、それは鳥の種子散布によるものなのかもしれません。散歩ついでにそんな木々を探してみると、身近な場所でも意外と見つけることができます。

もしかしたら野鳥が
タネを運んだのかも...

どんな鳥が、どんな植物の実を食べる？

公益財団法人 日本野鳥の会では、公益社団法人 国土緑化推進機構の活動助成を受けて、平成24年度～26年度の3年間にわたり、日本全国の日本野鳥の会会員からの情報、各種の文献や報告書、現地調査などから、日本にすむ野鳥がどんな植物の実を食べるのか調べました。その結果、野鳥105種が、総計463種の植物の実を食べていることがわかりました。このうち、身近な野鳥20種と樹木25種の相関関係を表にあらわしてみました。この表を見るとヒヨドリ、ツグミ、ムクドリ、メジロなどが、特に多くの種類の植物の実を食べていることがわかります。



野鳥が運んだ植物のタネ

多くの野鳥は、植物の実を食べています。みなさんも、木の実をついばむヒヨドリやメジロ、ムクドリなどに会ったことがあるのではないでしょうか。しかし、本当に野鳥がタネを運び、植物が育っているのでしょうか？ 都内郊外に所在する日本野鳥の会の関連施設で行なった調査では、確認された植物267種のうち、人為的に植えたもの又はその可能性が高いものが39種で、残りの228種が自然に入り込んできた可能性が高い種でした。一方、調査地周辺の鳥類について調べたところ、62種（うち外来種3種）が確認されました。確認された鳥類のうち、40種が木の実を食べる鳥類であり、自然に入り込んだ可能性が高い植物228種のうち、140種がこれらの鳥類によって種子散布された可能性があることがわかりました。このように、この調査地では当初植栽した39種から、18年後には実に228種もの植物が新たに成長しており、その半分以上が鳥類によってこの地にもたらされた可能性が高いことがわかりました。



野鳥と木の実の相関図

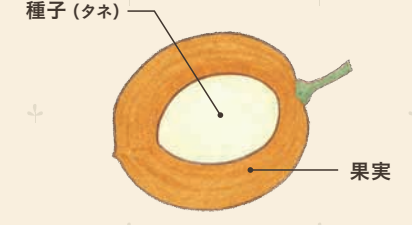
※ここに掲載した物は、ほんの一例です。詳細は、巻末にご案内しましたホームページ内の報告書（PDF）を是非、ご覧ください。
※植物の種名前の▶は、写真ありのものです

	コゲラ	アオゲラ	モズ	カケス	ガシブト	ヤマガラ	シジュウカラ	ヒヨドリ	エナガ	メジロ	ヒレンジャク	ムクドリ	シロハラ	ツグミ	ジョウビタキ
▶ イチイ		○		○		○		○	○	○	○	○	○	○	
ヤマモモ					○			○		○		○		○	
▶ ムクノキ			○		○	○	○	○		○		○	○	○	
エノキ		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	
ヤマグワ	○		○		○			○		○		○		○	
▶ クスノキ				○	○	○		○		○		○	○	○	
ヒサカキ		○	○				○	○		○	○	○	○	○	○
▶ ヤマザクラ		○		○	○	○		○		○		○	○	○	
ノイバラ		○	○					○		○	○	○	○	○	○
▶ ナナカマド類	○	○		○	○			○		○		○	○	○	○
カラスザンショウ	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
▶ ハゼノキ	○	○			○		○	○		○		○		○	○
クロガネモチ			○		○			○		○	○	○	○	○	○
▶ コマユミ	○						○	○	○	○		○	○	○	○
▶ ミズキ	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○
キツタ（フユツタ）				○			○	○		○	○	○	○	○	○
エゴノキ				○	○	○	○	○		○		○		○	○
▶ ムラサキシキブ	○	○	○					○		○		○	○	○	○
▶ クサギ						○	○	○		○		○		○	○
ガマズミ		○		○		○		○		○	○	○		○	○

野鳥と木の関係（野鳥が木を運ぶしくみ）

ここでは、「野鳥が木の実を食べて広がる」タイプの植物と、「野鳥が土に埋め、食べ残したり忘れてりして広がる」タイプの植物のしくみを、図で紹介しています。

野鳥が食べて広がるしくみ



「野鳥と木の実の相関図」で紹介した、多くの野鳥たちがこのタイプです。これらの野鳥は、小さめの木の実を丸呑みし、果肉部分のみを消化し、硬いタネは消化されずにフンとして排出します。そして、排出（散布）されたタネは、新しい地で芽を出すというしくみです。

野鳥が土に埋め、食べ残したり、忘れてりして広がるしくみ



「野鳥と木の実の相関図」で紹介した中では、カケスやヤマガラがこのタイプです。これらの野鳥は、木の実を土の中などに隠す行動（貯食行動）をよくすることで知られています。多くの木の実は、冬場に掘り出して食べてしまいますが、中には食べ残したり、隠し場所を忘れてしまったりすることもあるため、埋めておいた場所から芽を出し森づくりに貢献するというしくみです。